

業者婚をした中国女性の主体性と葛藤

郝 洪芳

京都大学

はじめに

業者婚というのは、男性と女性が仲介業者を介して知り合い、結婚することである。本稿で論じる業者婚をした中国女性とは、国際結婚紹介所などの仲介業者を通じて、日本男性と中国で結婚し、その後日本に来て、日本で暮らしている中国女性たちのことである。結婚までの流れ¹はおよそ以下の通りである。①日本男性が仲介業者のところで何人かの女性候補者を選ぶ。②女性に交際を申し入れる。③通訳を介し、手紙やメール、ネットのテレビ電話で交流する。④中国でお見合いをする。⑤婚約。⑥男性が日本に帰国。手紙、メール、テレビ電話で交流する。⑦中国で結婚式を挙げる。⑧女性が来日。日本で一緒に暮らし始める。このような、お互い言葉が通じず、通訳を介して短期間付きあい、国境を越える移動が伴う、発展途上国の女性と先進国男性との結婚は、社会問題視され、人身売買とみなされる場合もある。しかし、本稿ではこのような結婚の是非などマクロな問題を論じるつもりはなく、具体的な事例を通して、このような結婚をした女性当事者の人生に注目し、漠然とした「日本男性と結婚した中国女性」という平板なイメージを破り、喜怒哀楽に満ちた日々を過ごしている鮮やかな個人像を探し出したい。そして一般論ではなく、三人の調査事例を細かく描写することによって、それぞれの人生経験における結婚の位置づけと意味合い、女性たちの考えや体験、葛藤などを紹介したい。ごく少数の事例で何が代表できるのか、何が説明できるのかと問われそうだが、個人が見えない一般論や、画一的な一括りの扱いを避け、思考に富み、主体性のある個々人を表出しようというのが本稿の主旨であることを、まずはお断りしておきたい。

第1節では、先行研究を概観し、業者婚をした中国人女性が属する「アジア人妻たち」に関する研究にはどのような特徴があるのかを見つめる。第2節では、筆者の視点や調査方法を述べた上で、中国人女性三人の事例を具体的に描写する。第3節では、事例から見た女性の主体性と葛藤を分析し、最後に本稿の結論を述べる。

1 結婚の流れは、国際結婚紹介所のホームページなどを参照し、まとめたものである。

I アジアから来た妻たちはどう描かれてきたか

第1節では、国際結婚に関する研究をレビューし、その中から「アジア人妻たち」に関する研究を相対化し、その特徴を見てみよう。

日本では国際結婚を扱う研究の大半は「妻」に関する研究である。賽漢卓娜(2006)はそれらの研究を「日本人夫と結婚する欧米人妻」、「外国人と結婚する日本人妻」、「アジア人妻」と研究対象によって三種類に分けて分析している。

それによると、欧米人妻と日本人夫に注目する研究は豊富ではなく、性別役割分業を分析した Imamura(1990) や、文化的差異と異文化適応に重点を置いた Nitta(1992)、Diggs(2001)、渋沢(1994)、佐藤(1989)などの研究がある。そこでは、「日本社会と女性の出身社会との間における差異が前提として強調されること、及び女性が異文化に接触する際の不適応、コミュニケーション障害などの現象」に焦点が当てられていることを明らかにした。

また、外国人夫と結婚する日本人妻に対する研究は歴史が長く、量も多く、多方面からアプローチした研究がある。例えば、鎖国時代、明治時代の国際結婚における日本人女性に関する研究(小川 1995、竹下 2000、嘉本 2001)、第二次世界大戦中、大戦後に米国軍属関係者と結婚渡米した「戦争花嫁」や台湾植民地時代の日本人に関する研究(竹下 2000、坂岡 2004)、近年居住地域についての研究、さらに異宗教結婚、「戦争花嫁」の延長線にある米国軍人の妻についての研究などがある。日本人妻に関する研究は「結婚相手の文化、宗教、生活習慣及び海外在住のときのホスト社会に対しての適応プロセスとパターンが紹介されることに主眼が置かれる」(賽漢卓娜 2006:80)。

しかし一方、アジア人女性と日本人男性の結婚に関する研究は地域社会学と農村社会学の分野が主流で、心理学も加わる。主に国際結婚をめぐる社会環境とアジア人妻の意識と適応という二つの角度から論じられている。前者のほうは受け入れ側の変容に注目した松本・秋武(1994、1995)らによる山形県の地域住民を対象とする調査や、右谷(1998)による国際結婚に伴う農村社会と「家」の変化についての研究や、宿谷(1988)の受け入れ側としての日本を批判したレポートが例に挙げられる。後者のほうは山形県の農山村に嫁いだアジア系外国人妻の生活・居留意識をアンケートで調査した中澤(1996)の研究、精神科医でNGOスタッフである桑山(1996、1997、1999)の研究が重要である。また、もう一つ注目に値するのはこれらの研究の中で、アジア人妻たちは多くの場合、「妻」ではなく「嫁」と呼ばれていることである。

欧米人妻・日本人妻に関する研究は「異文化が何よりのスタートであり、夫婦間のみならず、移住先の社会、そして夫の家族との間に異文化接触が起こり、それにいかに適応し、アイデンティティが再確立するプロセス及びパターンが描かれる」一方、アジア人妻に関する研究は「日本社会側から彼女たちを扱おうとして」いて、「異文化を経験する当事者としてのアジア人妻自身の姿が薄く、地域社会、更に日本人家族により焦点が当てられている」(賽漢卓娜、2006:82)のである。それに、「アジア人妻を日本社会に同化して行く単なる外国

人妻として一括りにすることで、彼女たちの主体性が明確に浮き彫りにされにくくなっており、研究全体が「読者にネガティブな印象を与えている」（賽漢卓娜 2006:83）のである。アジア人妻に対する研究は最初から国別ではなくアジアから来た妻を一括に「嫁」と位置づけてしまい、日本社会や「家」の変容に焦点を当てている。さらに、斡旋業者を通じて来たアジア人妻たちに関する研究はそれを社会問題として論じているのが大半で、アジア人妻たちの母国の文化背景や、アイデンティティの変容や異文化適応など主体として論じる研究は極めて少ないのが特徴である。

以上のような先行研究の問題点を踏まえ、本稿は中国女性三人の事例を通して、アンケート調査や「アジア人花嫁」という一括りの扱いでは見ることができない、女性の主体性と葛藤を描写する。そして一人ひとりの違う経験や、それぞれの人生の中でこの結婚はどのような意味を持つのか、結婚した彼女たちはどういうふう暮らしているのか、どのような思いがあるのか、見ていきたい。

II 調査手法と具体的な事例

アジア人妻たちはいったいどのような経験を経て、日本人と結婚し、日本で暮らすことになったのか、また、日本でどのような生活をしているのか。その間に彼女たちはどのような思いをしているのか。いままでの研究ではそのような部分が中心的な問題になることはなかった。筆者はアジア人妻の大半を占めている中国人妻に焦点をあて、彼女たちの人生に注目し、それぞれのライフコース上におけるこの結婚の位置づけ、彼女たちにとって日本に越境したことの意味をあらためて探してみたい。

この調査は特に、社会的に問題視されている業者婚を対象にしている。2007年6月から断続的に調査を行ってきた。半構造化インタビューという質的調査の方法を使い、業者婚をした中国女性12人、仲介業者7人、日本男性9人に聞き取りをした。多くのインタビューは2、3時間で集中的にしたわけではなく、定期的に電話で話をしたり、会ったりして、できるだけ長いスパンで彼女たちの経験、心情の変化を観察することに努めた。この調査結果のうち、本稿では三人の事例を取り上げ、具体的に描写する。この三人はほぼ同じ時期に来日し、調査が始まった時点でちょうど日本に来て一年程度であった。それから一年半の間、頻繁ではないものの、連絡がとだえたことはない。継続的な調査を通してこそ見られる、それぞれの心情の変化、生活の変化などが特徴的に現れている。

事例1 Hさん 36歳再婚 2006年5月来日（夫 58歳、自営業）

結婚するまでの経験

Hさんは農家の生まれで、姉、兄、妹の三人兄弟がいる。中学校を卒業して、幼稚園教師養成の学校に入り、2年間で卒業した。その後、22歳の時、同じ学校の一つ年上の先輩と三月付き合っ、結婚した。結婚後、家で幼稚園を開いたり、ほかの幼稚園で仕事をしたりす

るなど、ずっと幼稚園の教師をしていた。家は裕福とは言えないが、息子が一人いて、三人で十数年間そこそ幸せに暮らしていた。しかし、そんな平穏な生活はやがて夫の浮気で壊された。夫は別の女性と同棲するようになった。Hさんはそれが許せなくて、子供の親権を取り、離婚した。そして、意地を張って、自分と子供が絶対幸せになって見せようと思った。だが、子持ちで離婚したHさんは中国で再婚相手を見つけるのが難しいという。比較的早く再婚ができ、また自分を大きく変えられそうなのが、日本人と結婚して日本に行くことだと彼女は考えていた。

結婚の決意

Hさんの出身地では歴史的な縁で、日本に行っている人が多い。Hさんの親戚や近所の人でも何人か日本にいる。みんな幸せそうに日本で暮らしている。そのような周りの状況を見ているうちに、Hさんも離婚後、中国で時間をかけて再婚相手を探すより、いっそ日本に行ったほうがいいのではないかと考えた。それで、結婚紹介所に登録した。Hさんの出身地では外国に嫁ぐため、お金を払わなければならない。結局借金して100万円を払って、今の夫と結婚した。結婚する前に不安がまったくなかったとはいえない。家族、特に母親に反対された。日本は遠いし、仲介紹介で結婚相手はいったいどんな人なのかもわからないからである。彼女自身も、日本に行つてうまくいくかどうかかわからず、不安はあった。しかし、行つてみたい気持ちはなによりも強かった。行つてみないとなにもわからない、日本に親戚や知り合いもたくさんいるし、とにかく、ここを離れて、外国で自分なりの幸せ、新たな可能性を見つけようと、少なくともほかの人みたいにお金でも儲けて、変身してみせようと覚悟を決めたのだ。だが、現実で紹介してもらった日本人夫とは22歳の年の差があった。「初めて会ったとき、父親と歳が近くて、顔を見たとき、自分でも少し驚いた。でも、なんとなく優しくそんな人だし、自分のことを大切に思ってくれている感じで、まあいいやと思った」とHさんは言う。夫のほうは一度離婚の経験があり、自営業をしている人である。

来日後

そんな思いを持って、Hさんは日本に着いた。実際に日本で生活してみたら、やはり想像したのとギャップがある。中国にいた時に、Hさんの脳裏にイメージした日本の生活は甘いものだった。しかし、家族や友達を離れ、まわりに中国人もいなくて、異国の地でまず逃げられないのがホームシックである。電話で泣いたりもした。そして、物価が高い。お金がかかるから、簡単に帰省することもできない。夫とは中国語と日本語を混ぜて、なんとか意思疎通ができるが、外に出ると一切通じない。にぎやかな郷土からこの静かな町に来て、どうにも心寂しいのである。夫にいろいろなところに連れて行ってもらって、楽しい時もあるが、寂しい時は寂しい。

助け合うネットワーク

幸い、日本では故郷からきた親戚や知り合いが多く、みんな日本の各地に住んでいるが、お互い頻繁に連絡をとって、随時情報交換をしている。Hさんは暇な時には、みんなと電話でおしゃべりして楽しい時間を過ごし、何か問題がある時には、みんなにアドバイスを求めている。在留資格の申請手続き、日本の習慣、仕事のことや周りの日本人のあれこれから、格安航空券まで、あらゆる必要な情報がこのネットワークを通して飛び交っている。そのため、Hさんは日本で言葉が通じず、周囲に知り合いの中国人がいないにもかかわらず、それほど困らない。このネットワークに支えられ、Hさんはだんだんと日本の生活に慣れていった。

仕事

日本に来て二ヵ月後、働き出した。日本に来るため、借金があったので、返済しなければならぬ。そして、夫のほうも裕福ではないから、家計を支えるためにも働かなければならなかった。言葉が通じないので、断られることも多かったが、なんとか仕事ができる。仕事をする時のHさんは無遅刻、無欠勤を徹底し、一生懸命と言う。車の部品メーカーで、一時間以内でどのぐらい組み合わせられるか、一人ひとりの数が計算され表記される。Hさんはいつもグループの中で数が一番多い人である。しかし、順調ではない時もあった。最初の仕事場で理由がわからないまま、契約を切られてしまった。Hさんは自分が中国人だから切られたのだと不服に思い、裁判を起こし、結局、賠償を受けた。もう一回は2008年後半の経済危機の時で、不景気のため、車部品メーカーが派遣社員を切ることになった。Hさんはいつもグループで一番仕事が速い人なので、一番遅く切られたけれど、それでもやはり仕事がなくなってしまった。仕事がなくなるたびに、彼女は落ち込んで、家族や友達に相談し、また立ち直って、新しい仕事を探していく。

夫婦

Hさんがこれほど仕事をがんばっているのは、絶対幸せになって、変身して見せようというプライドからだと思われる。そして、日本人の夫とは22歳の歳の差があり、夫婦生活がほとんどない。夫は優しい人だけど、夫婦というより家族に近い。夫との生活から実際の夫婦の幸せが得られないので、仕事をしてお金をためて、中国でマンションを購入したり、自分と家族の生活を変えたりすることで一種の達成感を得るのである。

家族

「父親はもう63歳なのに、まだ懸命に働いている、大工の仕事で屋根に上ったり、大変よ。わたしが少しでもお金を儲けたら、その仕事をやめて欲しいの。母親も病気で体の具合がよくないけど、まだ農業をやってるし、うちの子の面倒を見てくれている。うちの子も勉強ができなくて、中国で将来が見えないの。こちらに呼び寄せたいね。こちらに来て、日本語を

勉強させて、言葉ができれば、いくらでも仕事があるからね。両親が離婚した子はかわいそうね。でも、こここんなに寂しいから、うちの子が慣れるかどうか、ちょっと心配だけだね」。Hさんは家族思いの人である。中国に残してきた子どもを自分のそばに呼び寄せたい。最初の頃、自分も日本の寂しさに耐えるのに精一杯で、子どもは耐えられるか心配だった。でも、子どもの将来を考えて、結局呼び寄せてきた。親子は家で喧嘩することも多いけれど、子どもが思ったよりスムーズに日本の学校に馴染んできて、学校に行くのがたのしみになってよかったとHさんは言う。

事例2 Sさん 37歳初婚 2006年9月来日(夫 56歳、会社経営 再婚)

Sさんはもともとダンス教育の短期大学卒である。卒業後もさらにダンスの勉強をしたくて、北京で一年間研修し、その後、大学まで進学した。中国にいた時は、政府の文化センターでダンス教師をしていた。それとは別に、自分のダンス教室も持っていた。月収は15万円くらい、地元ではかなりの高収入であった。

外国に興味

90年代からまわりの友達が何人か外国に行って、外国のいろいろな話を聞かされているうちに、Sさんは自分も外国に行ってみたいと考え始めた。その時に、ちょうどシンガポールで中国語教師を募集していたので、Sさんは旅行で一週間シンガポールに行ってみた。現地で中国語教師の待遇がそれほど良くないことがわかったのと、まだ若いという理由で、外国に行くことを家族に猛反対されたため、結局、シンガポールには行かなかった。2000年頃になると、30歳近くになったSさんはアメリカに行こうと考えた。アメリカに友達がいて、留学のビザを代理申請してもらったが、領事館で却下されてしまった。その間に、Sさんの姉夫婦はイギリスに移住した。

恋愛

一方、Sさんの恋愛の道もそんなに順調ではなかった。80年代、中国で「下海」(ビジネス界に身を投じること)が時流になって、「下海」によって成金になった人との結婚が流行っていたとSさんは言う。彼女もそのような人と付き合っていたが、うまく行かなかった。その後、高学歴の人との結婚が流行って、Sさんは大学院卒の人と付き合い合った。それもまたうまく行かなかった。だんだん仕事も忙しくなってきた、恋愛する暇がなくなった。ダンス教室を持つことによって、忙しくなったとともに、月収もどんどん上がっていった。そうすると、自分より給料の安い人との結婚もいやになって、選択の範囲が余計狭くなった。「わたしがいつも冷静すぎるのかな?いままで恋愛で熱くなって盛り上がったことがないわ」。唯一好きな人は彼女が結婚したい時に、結婚してくれず、そのまま別れてしまった。

外国に行く理由

30歳になってから、彼女は現実的になり、いい結婚相手を探しながら、外国に行くチャ

ンスも探していた。「もし中国でいい人にめぐりあえたら、わたしは別に外国に行かなくてもいいの。でも、なかなかいい人が現れないから、外国に行くこともあきらめなかった。両方の準備をしていたんだ」とSさんが言った。そして、友達の紹介で結婚紹介所に登録して、今の夫と結婚した。結局、彼女は結婚とともに外国に渡ったのである。

中国で収入も高く、自分の車や家も持っており、あちこち旅行などもよくしていたSさんは、なぜそんなに外国に行きたかったのか。「中国はどんなに発展しても、やっぱりまだまだ発展途上国。国って、自分の親みたい、誰でも自分の親がいい親であって欲しいもの。中国人はみんな自分の国が日々強くなって、豊かになって、外国人が憧れる国になって欲しいでしょ。でも、一人の力では何も変えられないじゃない。人生って、そんな何十年くらいのものでしょ、その短い間にいろんな生き方をしたいし、いろいろ体験してみたい。一度でも先進国で暮らしたいのね。若いうちによりいいところへ移動するのも悪いことじゃない。外国に行って、外国語を勉強して、残りの人生が大きく変わるかもしれないわ」。Sさんは中国で仕事が順調だった。しかし、先進国への好奇心と憧れがあり、一度しかない人生だから、先進国で暮らしてみたい、外国語を習得して、人生に新たな道を切り開きたいという思いがあった。

しかし、外国で本当にうまくいくかどうか彼女自身にもわからなかったので、戻れる道も敷いておいた。Sさんは内緒で結婚し、人には「日本に勉強に行く」と言った。仕事も保留してもらった。

結婚

夫とは19歳の歳の差がある。結婚の時、躊躇しなかったとは言えない。でも、選択の余地がなかった。日本男性は何人かの女性から選ぶので、その時、Noと言って結婚を逃したら、次がいつ来るかわからないのだ。どうせ外国に行く決意をしたのだから、早く行ったほうがいいと彼女は考えて、結婚した。

彼女なりの結婚哲学はこうだ。「実際、結婚は条件の上に成り立つものなの。二人の間に愛情しかいないというのはありえないと思う。特に女ね、そういうコトワザがあるんじゃない？『男怕选错行，女怕嫁错郎』（男は間違えて仕事を選んじゃいけない、女は間違えて男を選んじゃいけない）。でもね、婚姻は確かにときには未知数だね。宝くじを買うみたい、賭けの性質があるのね。人はそれぞれの運命がある、運が良かったら、うまく行く、運が悪かったら、離婚になるかもしれない。どうなるか、誰も予想できないわ」。「今の夫と結婚する前に、言葉が通じないから、結婚後のコミュニケーションに問題があるのが目に見えている。でもね、あたしね、まず条件を見るの、まず学歴、そして収入を見るの、彼は大卒で社長でね、たとえ小さな会社でも、貧乏な人ではないと思うの。で、身長などを見る。彼は183センチだから、これも大丈夫。これらの条件を備えた上で、あとは恋愛感情だね。情って言うのは長く一緒にいると必ず芽生えるとも言えるでしょ。一緒にいたら、時間が経つにつれて、感情も出てくるでしょう。このような国際結婚はね、結婚前に付き合う時間なんて

まったくくないのよ。普通はまず恋愛して、その後結婚するんじゃない？だからね、結婚する前にお互い愛し合ってるなんてありえないの」。このように、全部わかっていながら、Sさんは自らこの道を選んだ。

来日後

しかし、Sさんにとっても現実と想像との間にはギャップがあった。想像がつかなかった言葉の壁やホームシック、以前の充実した生活から今の専業主婦生活になった時の虚無感、慣れない食事など、中国でかなり覚悟したつもりだが、現実になるとやはり大変なところがいっぱいあった。その中でSさんが一番困っているのは言葉の問題である。中国にいた時は、まわりに日本語の環境があるから、習得がきつと早くて、一年くらいでだいたいできるようになると予想していた。しかし、一年が経っても、まだまだ壁が厚い。それで挫折感を覚えているのである。Sさんは日本に来てからすぐ大きな日本語学校を見つけて、通い始めた。そして、積極的に国際交流会館の日本語教室に出たり、一生懸命日本語を勉強している。だが、なかなか覚えられないところもあって、まだまだ会話するには支障が大きい。

仕事

その時、周りにバイトでもしたら日本語がうまくなるし、毎日することがあっていいじゃないと言われたが、Sさんはなかなかバイトすることができなかった。「中国でね、いつも『先生、先生』と呼ばれてたのにね、ここで皿を洗ったり、部品を組み合わせてたりするにはどうしても抵抗があるのよ。でもね、いまの私の日本語レベルではそのような仕事しかできないよ。そのような仕事はどうしてもいやでね。それで、スーパーなどで接客の仕事をしたら言葉の練習になれるかなと思って、そのような仕事を探したの。でね、挨拶もちゃんとできてないのと言われて、だんだん諦めがついたの。しかたないから、普通のバイトでもしてみようと決心した。最初は直接お店に行って探すのが恥ずかしくて、電話をかけたりの。でも、直接会って話したら、たぶんまだ少しマシと思うんだけど、電話だったら余計難しくて、言葉がわからないよ。で、結局『すみません』だけがわかって、それはだめだってことでしょ。その時ね、本当にすごくショックだったのよ。自分がお皿を洗うくらいの仕事もできないってことじゃない。だから、もうあきらめたの。いまは、毎日学校や家で一生懸命日本語を勉強しているだけ。もう少しできるようになったら、また仕事を考えよう」。中国ではダンス教師をしていてプライドの高いSさんにとって、肉体労働のようなアルバイトはどうしても抵抗があるのだ。しかし、日本語ができない自分はそのような仕事にしかつけないのも現実である。

Sさんは日本語の勉強に一生懸命だけではなく、できれば大学院に入って進学したいとも考えている。2008年に日本語学校を卒業して、大学に入り、研究生として勉強しはじめている。

夫婦

では、夫との関係はどうだろう。「夫はね、忙しいのよ、毎日。朝も早いし、夜7時か8

時くらいに帰ってきて、学校で習った日本のサラリーマンの特徴と一緒にだよ、起きる、食べる、寝る、それだけ。あと、野球を見てるの、毎日毎日必ずそれを見る。一緒にいる時間は一時間くらいかな。それでも、あまりわたしと話をしなくて、テレビばかり見てるの。週末は時々一緒に買い物に行ったり、外食したりするけど、いつも、彼は彼の部屋で仕事をして、わたしは私の部屋で勉強をする。「まあ、彼はいい人だけど、ちょっと歳の差が大きいね。一緒にいると、きっと周りに夫婦だと思われたいよ。彼が私と結婚したのもきっと愛情のためではないね、こういう国際結婚は最初に愛情があったって言ったろうそだよ。彼は仕事の手伝いをして欲しかったみたい。中国関係の仕事の付き合いとか。でもね、言葉が大きな問題だよ、日本語ができないから、仕事の付き合いに付き合うことができないの」。

友達

Sさんは日本であまり友達がいないようである。日本語学校で知り合った、結婚で日本に来た人たちは自分と違う出身地の人が多く、しかもよく自分の夫のことをみせびらかすし、教養のない行動をとるので、そのような人たちと深く付き合いたくないとSさんは言う。Sさんはそのような人たちと交流して情報などは交換するが、心を開いた付き合いはしない。

思い

現在の生活や自分の選択について、Sさんはいまでも考えている。ときに運命だと嘆き、ときにやっぱり来てよかったと思う。「中国にいた時、もうね、ほんとに毎日かわりのない生活にうんざりしてたの、外国に行って、新しいものや生活にチャレンジしたかったのね。でも、いったん実家を出たら、祖国と離れたら、またもとの生活が恋しくてね。人間って、やっぱりあれなのかな。ないものねだりって言うか、欲しいものをいったん手に入れたら、その意味や価値もなくなる。で、大切なものも失ってはじめて大切だと思知らされるね。でも、もし今回の結婚をせずに日本に来なかったら、それもきっと後悔すると思う。まだ日本にいる時間が短いから、まだ慣れてないから、こういう矛盾した気持ちになるのかな、もうちょっと長くいたら、よくなるのかな、わからない」。Sさんは中国に帰ることも考えた。しかし、このまま帰ってしまうのも悔しいという。

いろいろ悩みながら、この道を選んだ以上がんばらないといけないというような気持ちで、日本語を勉強し続け、大学院進学を目指している。日本語能力試験一級も受ける予定である。

事例3 Zさん 29歳初婚 2006年7月来日(夫 47歳、サラリーマン 初婚)

結婚までの経緯

Zさんは中国のごく普通の小さな町で生まれ育った。高校卒業後、デパートの営業員をしていた。その後、テレビ局で受付として一年間勤務した。2000年に、友達が30歳の日本男性を紹介してくれたが、当時、まだ若かったし、親も心配で反対したし、彼氏がいたので、きっぱりと断った。しかし、その彼氏と5年くらい付き合い合った挙句、別れてしまった。と

でも傷ついた。しかも、もう25歳になってしまって、故郷では未婚の女にとってけっこう難しい年齢である。なかなか出会いがなくて、両親も焦ってきて、いろいろな情報を集めたりしていた。そのうち、国際結婚も考えるようになった。「あたしの場合、もう歳だからね。ほんと、歳をとるにつれて、結婚相手に対する要求も変わってくるね。若い時は本当に何も考えずに、ただ好きでいればいいんだけど、だんだん大きくなったら、やっぱりこれからの生活を考えると、安定した収入があるか、家を持っているか、人柄がどうかなど全部見るようになるのね。でもね、まわりにはいい仕事を持っていて、持ち家もあって、人柄もいい男が少ないよ。なかなか出会えないの。あと、条件のいい人なら、よく浮気するしね」と彼女は言った。それで、新聞で見た結婚紹介所に電話して、今の夫を紹介してもらった。「家に姉がいるから、両親は少し心配しているけど、夫が優しくそうな人だし、それほど反対しなかった。もし、家にわたし一人しかいなかったら、たぶん外国には行かないと思う。で、日本人との結婚、いいことも悪いことも聞いている。よし悪し全部運命でね」。そうして、Zさんは姉と両親を残して、日本に来たのである。

来日後

Zさんも来日後、ホームシックにかかった。いままで実家を離れたことがないので、毎日パソコンで両親と話していても、やはり泣いたりしたことがある。頻繁に帰省することができない、テレビを見ても意味がわからない。毎日、夫は朝から夜遅くまで仕事なので、いつも一人で家にいる。来る前に友達から日本の話を聞いた。高層ビルやきれいな夜景はどこにでもある風景ではなく、二階建てのマイホームが多いとか、遊ぶところもそんなに多くない、どこでも静かだ、などの話である。ある程度の覚悟はしていたが、実際に来たら、本当に毎日退屈でたまらないくらい。少しずつ慣れてきて、一年くらい経った時は少しよくなった。

また、来日後妊娠したので、Zさんは子どもの誕生を待ち遠しく思っていた。子どもが生まれたら、自分は忙しくなるはずだと思っていた。

夫婦

夫はまじめな人で申し分ないが、歳が離れているせいか、Zさんが遊びたい時に、夫はいつもそのような気分ではない。「あたしね、ちょっと明るくておもしろい人が好きなの、だけどね、夫がね、ちょうど反対なの、無口で内向的なもの。どう言ってもだめなんだ。そういう性格なんだからね。休みの日も音楽を聴いたり、本を読んだりするだけ」。夫は内向的だけど、誠実でやさしい人なので、Zさんはそれほど大きな不満がない。完璧な人はいない、完璧な婚姻はないと自分なりに納得しているからである。家計のやりくりをして、夫と一緒に子どもの誕生を待っていた。

友達

Zさんは日本語教室で、同じく日本人と結婚して日本に来た中国女性何人かと知り合いに

なった。普段お互いよく電話でおしゃべりして、寂しさを紛らわしたり、相談したり、愚痴を言ったりする。このような自分と似ているような境遇にいる人が大切な存在だという。一方、Zさんはよくそのような人たちと自分自身を比べる。人の暮らしと比べて自分の生活状態を確認するのだ。似ているような状況だったら安心する一方、あまりにも違っていたら、嫉妬したり悩んだりもするという。

思い

Zさんにとって、日本で一番腹が立つのは中国人である自分に対する差別である。「日本人は礼儀正しく見えるんだけど、心の中で偏見があっても口に出さないだけだよ。今妊娠で病院で見てもらっている先生はまさにそうだよ。明らかに差別なんだよ。ほかの日本人女性を診察する時に、笑顔で時間も長いのに、あたしの番になると、なんか迷惑でもかけられているようで、いやな顔をするの。あの先生と顔を合わせると、すぐ腹が立つんだよ。ほかの人に対してあんなに丁寧なのに。いつも診てもらうときに、私の顔すら見ないのよ。言葉になってないけど、その仕草や表情を見たら、誰だってすぐ差別だとわかるのよ。とてもひどいよ。腹が立つことは赤ちゃんによくないから、できるだけ考えないようにしてるけどね」。

それだけではない。子どもが将来差別されないように、Zさんは日本で出産することを決めた。そうすると、日本国籍になるからである。中国にいる母親に出産の手伝いに日本に来てもらいたかったけど、母親の体の具合が悪いから来てもらうことを断念した。「母がいなくて、姑も体の具合がよくないから、手伝ってもらえない。一人で日本で生むのがちょっと心細いけど、仕方がないから、自分でがんばらないとね。中国で生むことも考えてたんだけど、やっぱり、子どもの将来を考えると、日本で生むと決心したの。出生地やパスポートが中国だと差別されると聞いているからね。日本で生まれたら、日本国籍で日本人で、学校に行く時に差別がそれほどないらしいの」。Zさんは誰にも頼らず日本で子どもを生むことを決めた。そして、無事男の子を出産し、育児に忙しい日々を過ごしている。

Ⅲ 女性たちの主体性と葛藤

以上の三人の事例からわかるように、それぞれ事情が違うけれども、三人とも主体的に結婚を選択したのである。

Hさんは夫に浮気され、離婚後、地元で再婚するより、むしろこれでいっそ日本に行ってしまうという気持ちになった。もともと日本人との結婚が盛んな土地柄でもあり、Hさんも本気でいきたいと思ったのである。高額な手数料を払ってまで日本に来た。Sさんは中国で結婚相手に恵まれないまま30歳を過ぎてしまった。もともと外国に行きたい気持ちも強く、結婚紹介所に登録し、いまの夫との縁があって結婚した。Zさんは長く付き合っていた彼氏と別れてしまい、また結婚を考える時に、現実的になり経済条件を重視するようになった。しかし、まわりにそのような条件の人との出会いがなく、あるいは条件の良い人なら自

分のことを大切にしない場合が多いので、今の夫と結婚した。

インタビューで感じたのは、女性たちはまず安定的な生活を求めるということである。自分を大切に思ってくれる夫がいて、経済的な心配のない安定的な暮らしを求めている。現実的には人口規模の違いで女性は日本男性を選ぶ余地がなく、選ばれるほうである。自分を選んだ人は決して思ったような白馬に乗った王子様ではない。歳の差が大きいのが普通である。その時に、彼女たちは、自分自身も決して条件のよいお姫様ではないと考え、そのような安定的な生活を求めるなら、ほかのところでも妥協する必要があると、納得している。また、簡単に外国に行けない彼女たちにとって、外国に行くこと、外国で暮らすことが新鮮で、行ってみたい、見てみたい気持ちも強いのである。中国で特に好きな人、結婚したい人がいない彼女たちは、日本人との結婚もそれほど躊躇なくするのである。

むろん、何でもかんでも思うとおりにになるとは限らない。初めて足を踏む土地で、慣れるまで時間がかかる。異国での寂しさを味わう。そのほか、Hさんの場合、日本語教室が家から遠く、通うのに不便で、まともに日本語を勉強したことがなく、ほとんどできない。夫と夫婦生活がない、仕事がなくなったりなどうまく行かないことが少なくない。それでも日本に来た以上、Hさんはなんとか自分を変えようとした。とにかく一生懸命仕事をして、地元でマンションを購入し、子どもの将来のために日本に呼び寄せた。Sさんの場合は、日本語の習得が思った以上に時間がかかり、良い仕事につけないことで悩んだ。それでも、このままあきらめるのが悔しいから、日本語学校に通って、猛勉強する。日本語能力試験を受けたり、大学院に入ったりして、将来、日中間でビジネスでもしようという目標に向かっている。Zさんは子どももできて、いまの生活にわりと満足している。言葉がまだできない、妊娠中に受けた差別が一番の問題だった。それで、子どもが差別を受けないように日本で生んで、日本国籍にすることにした。

三人とも日本に来たことを後悔した時があるところぼしたことがある。結婚紹介所にインタビューした時も、日本に来たばかりの女性たちは後悔したり、落ち込んだりすることが多いという話が出ていた。しかし、この時期を自分の努力で乗り越えたら、後はうまく行くという。インタビューの中で日本に来て8年や10年の人にも会った。日本語がまったく問題なく、ごく普通に暮らしている。彼女たちによると、日本に来て3年までは大変だった、一日中ずっと寝込んだり、あるいはパソコンに向かったりしたこともあるという。本稿で挙げた三人の事例はまさにその努力の途中なのではないかと思う。かわいそうだという見方もあるだろう。しかし、彼女たちにとって国境を越えることで、見聞が広がり、生活も変わったことは確かである。そして、いまの主体性を持った行動により、今後もさらに変わっていくだろう。

そして、この三人の事例からわかるように、同じ日本人と結婚した同胞たちとの間にも葛藤が存在するのである。みんなでネットワークを作って、お互い助け合い、必要な情報交換をしている一方、お互いの夫のこと、生活のことを比べて、優越感や満足感を得たり、剥奪感を感じたり、嫉妬や恨みを抱えたりする。Sさんのように、一部の人たちを教養のない人とみなし、深い付き合いをしないが、普段の情報はやはりこのような人たちに頼っている。

日本人との結婚について、彼女たちはそれが運命的な出来事だと語る時が少なくない。この結婚をして、その後どうなるのか、何を経験するのか、彼女たちにとっても未知のことである。ただ、自分で選んだ以上、何があっても自分で向き合っていく、自分の将来も自分の行動で作上げていくというのがわかっている。以上の事例からわかるように、彼女たちは困難に遭い、悩み、葛藤すると同時に、したたかに生きている。

おわりに

仲介業者を通じた結婚はマスコミなどにも注目され、ドキュメンタリー番組もある。しかし、番組の中でよく「光」と「影」という言い方を使い、幸せな夫婦と不幸な夫婦を例にあげているが、筆者はこのような分析の仕方に疑問を感じてしまう。いままでのインタビューで感じているのは、「光」と「影」は個々人の中で常に交錯し、交じり合って存在しているということであり、それらは必ずしもはっきり分けられるものではない。幸せそうに暮らしている夫婦の背後にも苦労や問題などがあり、ひどい目に遭ってかわいそうに見える人も日本に来て得たものが大きかったりする。それぞれの人生の一コマだけを見て判断するのではなく、長いスパンで見るとすべきだと思う。さらに大切なのは、国境を越えて外国人と結婚した人々がその生活のプロセスで直面する問題といかに向き合っているか、葛藤しながらも主体性を持ってたくましく生きているか、という点なのではなかろうか。

現在、国家間の人の移動が頻繁になり、以前であれば国内に限られていたお見合いが、人の国際間の移動により、国際化している。調査の中で、自分が日本に来た後、周りの日本人を中国の自分の友達に紹介したりするなどの話をよく聞いた。その感覚は国内のお見合いとそれほどかわらないように感じた。また、電子辞書の存在によって、言葉が通じなくてもコミュニケーションが取りやすくなり、通信産業の発達による国際電話の無料化が移動後の母国や家族との距離を縮めている。調査の中で、これらの手段が果たしている重要な役割を実感した。これで障害が減り、外国人との結婚も選択肢に入るようになる。しかし、一方、人為的政策による各国の出入国規定が依然として存在し、中国の場合、日本に行くことがまだまだ容易ではない。女性たちは結婚するまで日本に行くことができず、男性側の生活ぶりを知ることができないのである。外国人との結婚はみなにとって、一つの選択肢になるが、簡単に行き来できない限り、「賭け」になってしまう。だから、このような国際業者婚やお見合い婚の「結婚」はあくまでスタートでゴールではないと筆者は考える。男女双方にとって、外国人との結婚は一つのチャンスになる。しかし、その後どうなるのかは二人次第である。本稿は三人の事例を通して、女性側のことを紹介した。あまり触れていない男性側については別稿にて論じることとする。むろん、筆者が調査を行った事例はまだ少ない。今後もさらに調査を進めていきたいと思う。また、いままで調査してきた事例については、これからも注目していきたい。業者婚は問題が多く、複雑だと言われているが、地道な調査を積み重ねていき、実態究明と問題解決に力を注いでいきたいと思う。

参考文献

Diggs, B. Nancy (2001)

Looking beyond the Mask: When American Women Marry Japanese Men, State University of New York Press, Albany.

葛慧芬 (1999)

「国際結婚に対する地域ケアシステム作りの重要性—中国人花嫁の事例から」『日中社会学研究』7.

日暮高則 (1989)

『「むら」と「おれ」の国際結婚学』情報企画出版.

Imamura, Anne (1990)

“Stranger in a Strange Land: Coping with Marginality in International Marriage,” *Journal of Comparative Family Studies* vol. X XI: 171-191.

嘉本伊都子 (2001)

『国際結婚の誕生：「文明国日本」への道』新曜社.

小川騰 (1995)

『国際結婚第一号明治人たちの雑婚事始』講談社.

桑山紀彦 (1996)

『国際結婚とストレス—アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族』明石書店.

——— 編著 (1997)

『ジェンダーと多文化—マイノリティを生きるものたち』明石書店.

——— (1999)

『多文化の処方箋』アルク.

松本邦彦・秋武邦佳 (1994)

「国際結婚と地域社会—山形県での住民意識調査から (その1)」『山形大学法政論叢』創刊号.

——— (1995)

「国際結婚と地域社会—山形県での住民意識調査から (その2)」『山形大学法政論叢』4.

中澤進之右 (1996)

「農村におけるアジア系外国人妻の生活と居留意識—山形県最上地方の中国・台湾、韓国、フィリピン出身者を対象にして」『家族社会学研究』8.

Nitta, Fumiteru (1989)

The Japanese Father, American Mother and Their Children: Bicultural Socialization Experiences in Japan, University of Hawaii; Ph.D. dissertation (= 1992、藤本直訳『国際結婚と子どもたち』明石書店).

賽漢卓娜 (2006)

『「国際結婚」研究における『異文化』と『同化』—アジア人妻へのまなざしをめぐって—』『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』第53巻第1号: 75-87.

——— (2007)

「中国人女性の「周辺化」と結婚移住—送り出し側のプッシュ要因分析を通して—」『家族社会学研究』19巻第2号 (10月): 71.

坂岡庸子 (2004)

「国際結婚をした日本女性の生活史—ハワイ州オアフ島在住米軍人の妻」『久留米大学文学部紀要 社会福祉学科編』4.

佐藤隆夫 (1989)

『農村（むら）と国際結婚』日本評論社.

渋沢田鶴子 (1994)

「異文化間結婚—日本人男性と結婚している米国人女性の場合」『女性学研究』3.

宿谷京子 (1988)

『アジアから来た花嫁—迎える側の論理』明石書店.

竹下修子 (1997)

「国際結婚カップルの結婚満足度」『ソシオロジ』129号、42 (1) : 41-57.

——— (2000)

『国際結婚の社会学』学文社.

——— (2001)

「国際結婚における異文化適応—ヨーロッパに居住する日本人妻の場合」『愛知学院大学 教養部紀要』49 (1) : 53-61.

——— (2003)

「国際結婚におけるエスニシティの表象としての宗教—外国人ムスリンと日本人女性のカップルの場合」『家族研究年報』28 : 14-26.

光岡浩二 (1989)

『日本農村の結婚問題』時潮社.

右谷理佐 (1998)

「国際結婚からみる今日の日本農村社会と『家』の変化」『史苑』59 (1) : 73-74.